

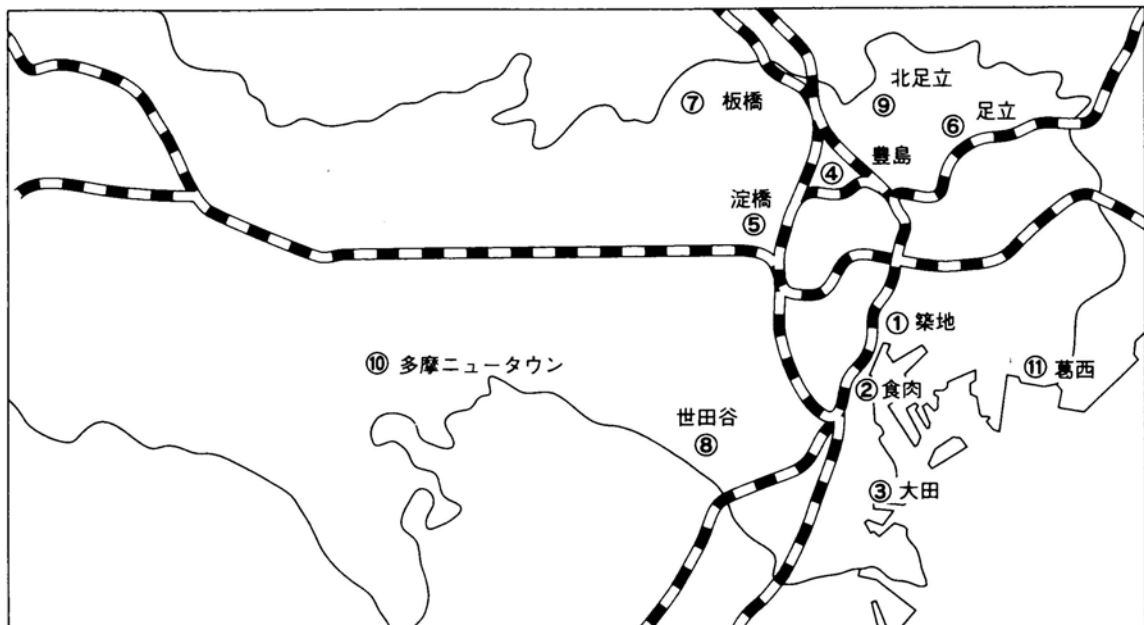
魚と野菜と肉

築地と大田と港南

チーム たちあがれ 築地

魚は築地 野菜は大田 肉は港南

私の提案する、築地再整備案は、大田市場にある水産部門を築地市場に統合し、築地市場にある青果部門を大田市場に統合し、築地は世界一の水産市場、大田は世界一の青果市場、港南の市場は世界一の食肉市場として、「それぞれがトップを目指す市場」です。これは、何も取扱量という意味だけではありません。世界から物が集まり競争があり、築地や大田だときちんと値段を決めてくれる。良いものは高く売れる。このことが、築地や大田区に出荷したいという原動力になり、それに伴って、様々なものが集まる。そのことが取扱量の増加につながり、市場の発展に、ひいては漁師や農家などの収入につながる。生産者も消費者も生き残れる。その役割を担うのが公設市場であり、役目だと思います。



図東京都の市場

例えばマグロ

例えばマグロなどは、世界の 60%を日本人が食べていましたが、中国や台湾をはじめ世界で刺身を食べるようになりました。正月の初セリで中国のバイヤーが高値をつけるなど、水産も国際競争が始まりました。大間のマグロをはじめとして、世界のマグロの値段を築地で値段を決める。築地に持っていけば、うまい魚はきちんと高値をつけてくれる。それなりのものはそれなりに。信頼のある取引、これこそが、築地のブランドであると思います。これが現在でも地球の裏側から築地の裏側から築地までマグロを運んでくる原動力でだと思えます。しかし、だんだん築地は敬遠されてきていることは事実です。運んでもメリットが無いというような市場になれば、マグロは中国などの他の市場に持っていかれるでしょう。マグロはたとえですが、他の魚種にもそのようなことがいえると思います。荷をもって行きたい市場にしなければならぬと思います。

なぜ豊洲だとだめなのか？-場所は大事！

では、なぜ豊洲がだめなのでしょう？土壌汚染の問題もありますが、それを除いたとしても築地である必要はあるのでしょうか？

確かに伝統や文化がという抽象的な言葉をきいても、よく分からないというのもそうだと思います。

でも、本願寺や銀座、場外市場に人が集まる、そこで何らかのものが売れる、ということはそこで物を売る人がいる。ということはそれをどこからか仕入れてくる。市場本体に関係ない部分も多くあるでしょう。でも、色々それが絡み合って物と金が動いていると思えます。そのなかには、市場の中に入って買う人もいます。市場関係者を相手に商売する人もいます。それらが複雑に絡み合って「築地」をつくっています。

小売の基本は、人が集まる場所、特に文化などを売りにしているところはなおさらです。

おそらく、豊洲に市場が出来たらこれらの複雑ななんともいえない関係があっさりとなくなる。豊洲の場合には、徐々に作っていける環境もありません、周辺の町とほとんど分断されているからです。築地の「場所」のポテンシャルは遥かに豊洲をしのぎます。

なぜ豊洲だとだめなのか？-分断された施設

豊洲市場に関しては、明らかに、大型取引の物流センターです。時代の流れからいうと、仕方ない部分や、そうであるべき部分はあると思います。ただ、それが全体を支配するようなことは良くない。要はバランスです。物流センターの機能も必要ですし、魚と向き合って細やかに取引する機能も必要です。バランスの取れた市場が必要です。

これが、これからのボーダレスの取引の中で生きていく手段であり、魚文化を誇る日本

の市場を維持していく手段だと思えます。青果に関しても同様だと思えます。野菜も世界から様々なものが輸入されていると思えます、佐藤錦が大量に入荷され高値をつける。これこそが市場のブランドであり入荷の原動力です。

なにも、高級品のみを扱うということではありません。そのようなものや様々なものを持ってきてくれる市場こそ、競争に勝てる市場だということです。

しかし、豊洲市場の水産は、315号線で、分断されています。仲卸から卸まで非常に距離が遠い、このことは非常に危惧する配置です。卸側から仲卸まで荷物を運ぶのにコストと時間がかかる、仲卸のかかわる大口取引も卸側で行われる。そうすると仲卸に物が集まらない。つまり、仲卸も大口取引のみの形態となりうる。つまり、つまるところ物流センターです。魚を見ないまま商売をするものが全体を支配するようになるでしょう。食文化もなにもあったものではない。

総合市場という考えもあるでしょうが・・・。

ライフスタイルや食文化の変化により、これからの市場は、総合市場で、ワンストップで野菜や魚を同時に買える市場という考える考え方もあるとは思いますが。ただ、巨大マーケットである東京においては、総合市場の必要性は薄いと思えます。地方市場に関しては、様々なものが買うことの出来る市場は必要かも知れません。しかし、築地市場には現在、魚を買いつつ野菜も買うというお客さんは少ないと思えます。スーパーなどは、野菜は野菜のトラック、魚は魚のトラックで入荷しています。

では、小さいレストランの人などは？ 確かに籠をもって市場に魚と野菜を買いに来る顧客さんはいます。何もこの人たちをないがしろにするわけではありません。ただ、割合にすると極めて少ないと思えます。そのために、巨大な青果は必要ないと思えます。数件の青果が残ってもかまわないと思えますし、仲卸業者などが、仕入れて売って新しい商売が始まってもいいのではないのでしょうか？

再整備は出来る？

再整備は出来ます。

ステップは以下の通り、

晴海の都有地に仮設物流センターをつくり、市場間転送や、市場外流通の部門を移転。

太田市場の水産を、築地仲卸の空き店舗に移動する。

太田市場水産部門の空きに、築地の青果を移転

太田市場が手狭であるといわれているが、荷物の立体化などを図ることを検討する。現在では、平置きで省スペース化を図る対策がとられていない。

築地青果部門の空きを種地として2回のローリングで再整備

完成後、晴海一時移転している部門を再移転

市場外流通や市場間流通に関しては、そのまま晴海で業務を行うことも検討に値すると思います。もっと戦略的に、晴海に大型船が世界から着けるように整備するのもいいでしょう。

つまり築地市場は水産のみの市場として整備するということです。

21世紀築地プロジェクトの発表の中でも、豊洲新市場の水産部門の面積と築地市場の面積の比較では築地市場の方が大きいとなっています。ということは、十分に再整備が可能ということです。

最後に

簡単にいうと、豊洲市場は消極的な案です。狭くなった広いところがいい。大口も主流になってきたし、物流センターにしよう。それが時代の流れだ。そんな感じです。

おそらく、この先なんとなく荷物は集まってきて、なんとなくは生き残っていくでしょう。でも、面白くない市場です。いつかギリ貧になる。

築地での再整備は、いろんな問題があります。しかし、戦略的に積極的に市場の競争を勝ち抜く市場として、生産者や出荷者が「築地市場」に運びたい。あそこに持っていけば、きちんと値段をつけてくれる。余ったものもさばいてくれる。そんな市場は、大口取引だけに特化した市場では無理です。ちゃんと商品を見てくれる部分もきちんとないと出来ない。このことが食の文化につながる。あまり、商品を見ない取引が大半を占めて、果たして日本の食文化は守れるのでしょうか？

築地市場に水産と青果が同居している背景には様々な要因があったと思います。しかし、築地だけを考えるのではなく、東京都の市場全体を考えると、青果部門が築地にある理由は実は余り見当たらない。築地は決して狭くはありませんが、広くもありません。青果も水産もともに生き残っていく市場のために、築地を水産市場に大田を青果市場の専門とするべきであると思います。

以上

中央卸売市場大田市場

大田区東海3丁目2番1号外

(平成21年4月1日現在)

